

薬局だより

どうして副作用は起こるの？

全ての薬には、目的としている作用である「主作用」と、目的としていない作用である「副作用」があります。みなさんは、どうして薬を飲むと副作用が起こることがあるんだろうと不思議に思ったことはありませんか？今回は薬の副作用が起こる原因についてお話ししたいと思います。

まず1つ目の原因は「薬の性質によるもの」です。多くの薬は、もともと体の中で起きている働きを強めたり弱めたりすることで効果を発揮しています。この薬の成分が血液によって全身に運ばれ、目的とする場所以外にも効いてしまうことで副作用が起こることがあります。例えば、熱が出て体のあちこちが痛むときに飲む解熱鎮痛薬。この薬は熱や痛みのもとになっている「プロスタグランジン」という体の中にある物質を抑えることによって熱や痛みを和らげているのですが、実はこの「プロスタグランジン」、熱や痛みのもととなる以外にも胃粘膜を保護するという役割も持っています。「プロスタグランジン」を抑えることで熱や痛みの他に胃粘膜の保護作用も抑えられるため、解熱鎮痛薬を飲むと胃の調子が悪くなってしまうことがあります。この症状を防ぐために病院では解熱鎮痛薬と一緒に胃薬を処方したりしています。

他の原因としては「薬の使い方や体質によるもの」があります。薬の使い方の原因としては、間違った用法・用量での服用や、相性の悪い薬や食べ物との飲み合わせの影響があげられます。体質による原因としては、年齢や体重などはもちろんですが、薬を代謝・排泄する肝臓や腎臓の働きが弱い人は薬が長く体に留まるために副作用が起こりやすくなることもあります。

「クスリはリスク」と言われるように、薬の「主作用」と「副作用」は背中合わせの関係にあります。なので、薬の正しい飲み方と共に起こりうる副作用とその対策を知ることがとても大切です。薬について何か分からないことがありましたら薬剤師にご相談ください。

＜参考＞中外製薬HP
(薬剤科 大川原ひとみ)